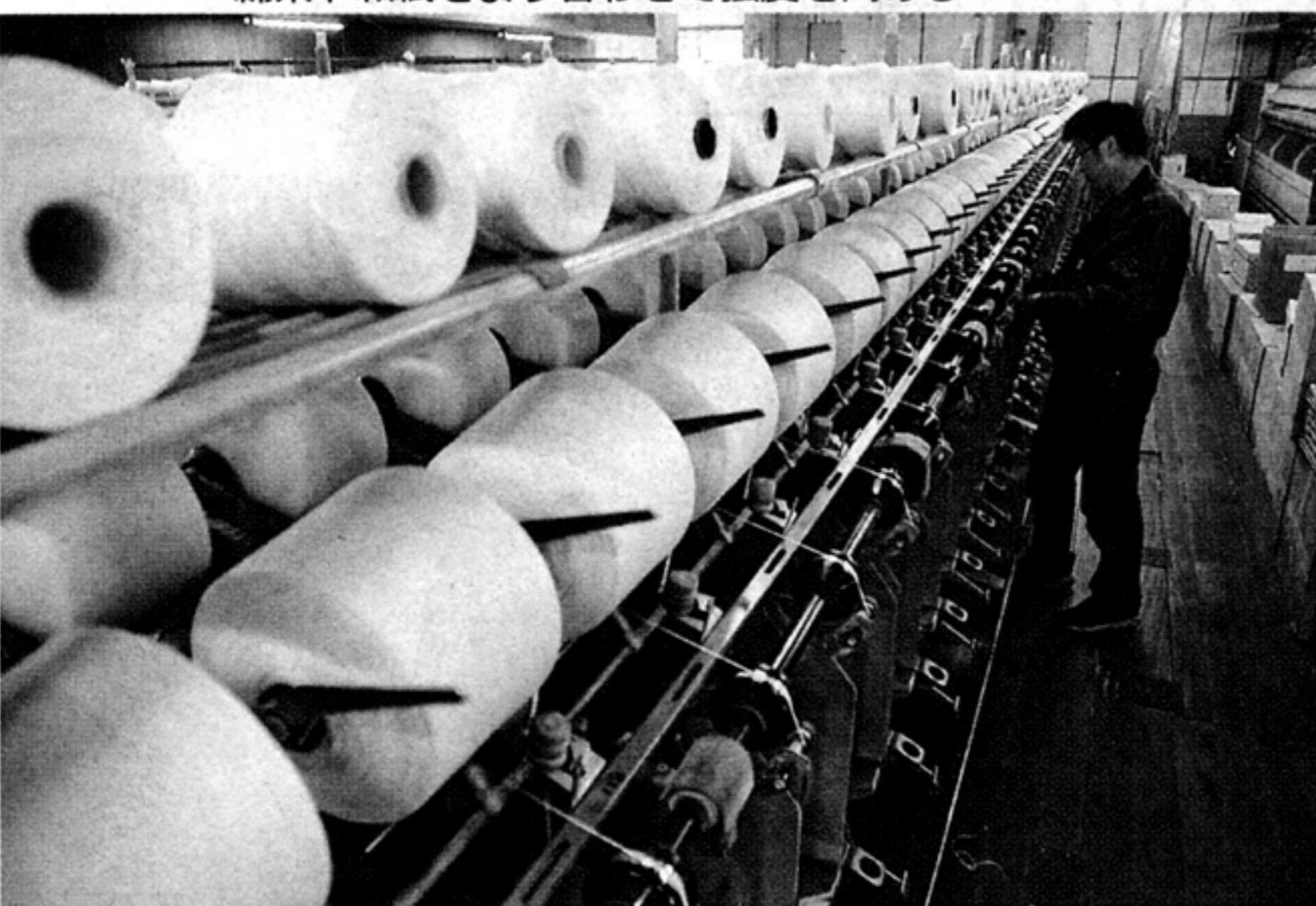


備後撚糸

オシリーワン ナンバーワン

月曜日に掲載します

幅約20㍍の撚糸機が絶え間なく稼働する工場。
綿糸や和紙をより合わせて強度を高める



《会社概要》1927年、光成猛社長のおじの故光成源一氏が福山市芦田町で撚糸業を始めた。43年から現社名。45年、同町内の現在地に移転、63年には株式会社化した。従業員20人。資本金2500万円。2006年3月期の売上高は1億8000万円。07年は2億円を見込む。<http://www.binnen.co.jp>

一見すると普通の糸だが、触ると滑らかさが伝わってくる。この糸、実は和紙でできている。撚糸業者の伝統技術を改良して生み出した「和紙糸」。紙は水に弱いとい

う先入観を捨て、水分を

含ませた和紙を糸に加工する。逆転の発想から世界で脚光を浴びる。

織維業

幅約一ミリ~三ミリのテープ状和紙が材料だ。特

和紙を、独自の撚糸機で

〇年代前半、不況に直撃

袋の取つ手の注文が舞い込んだ。「もっと滑らかにできないか」。光成社

長は当時、糸素材ではマイナーダラマに着目した。そのままよつた和夫も編み出した。

逆転発想 和紙糸生む

備後撚糸 福山市芦田町

水含ませて滑らかに

引つ張り上げながらねじり、糸に仕上げる。水分を含ませ加工するので表面が丸くなじみ、けば立たない。綿糸に比べ約三割軽く、吸水性や通気性にも優れるという。

「和紙と糸の組み合

せの意外性と機能性が受

け、サンプルの注文が相

次いでいる」と光成猛社

長(64)。既にタオルやカ

ーディガンなどへの製品

化が進む。一年半をかけ

て二〇〇四年秋に開発し

た「水より製法」。オン

リーワンの証しを得るべ

く特許出願中である。

独自製法は苦境の中でも生まれた。創業以来、織布、縫製業者から撚糸を受注し織維産業の初期工

程を担つてきた。一九九〇年代前半、不況に直撃する。生れた技が今、織維業界で脚光を浴びる。

前半に四百社に上った県内の同業者は〇三年には約三十社に激減。「業界の灯を消すまい」と光成社長は、前例のない技の開発を模索した。

命題は、湿った和紙を紙は水に弱いという常識を覆す挑戦だった。

デニムメーカーと協力して和紙糸を織り込んだ新素材の商品展開が、間近に迫る。

そんな折、紙製手提げ袋の取つ手の注文が舞い込んできた。乾燥を防ぎ湿り気を一定に保つため、ローラー収納部をふたで覆う工夫も編み出した。

ル回転速度や張力を探り、和紙の結束を強める溶液の配合試験を繰り返して、その結果を元に新たな溶液に数時間浸した。織維業界で脚光を浴びる。

社業の柱に育てたい



光成猛社長(64)

(小島正和)

の素材との組み合わせなど、アイデアが尽きない。顧客から逆に用途の提案を受けることもある。長年の受託加工で受け身の姿勢が続いてきたが、ようやく自分で価格を決められる仕事を得た。異業種との連携を強めて、将来は和紙糸を社業の柱に育てたい。低迷ムードの続く撚糸業界の励みにもつながるはずだ。